伝えよう いにしえの心 あたらしき智慧

上原 勇七

（昭和二十七年卒）

うえはら・ゆうしち
昭和八年生まれ。山梨学院大学政経学部卒業。
平成十六年　株式会社印傳屋　上原勇七　代表取締役会長
昭和四十九年　甲府印伝商工業協同組合理事長
昭和五十八年　財団法人山梨県甲府・国中地域地場産業振興センター副理事長
平成三年　ロータリーインターナショナル第2620地区ガバナー
平成七年　株式会社山梨県産品センター　代表取締役社長
平成十年　財団法人伝統工芸品産業振興協会　理事
平成十九年　甲府商工会議所　会頭

昭和二十年七月六日夜半、米軍機B29の空襲により甲府市の約半分が焼失。印伝屋も母屋をはじめ座敷棟、四棟の蔵も全焼。当時私は富士川小学校の六年生でした。

父は知人を頼りに北巨摩郡鳳来村鳥原（現在白州町）に疎開。私は鳳来小学校に通学する事になりました。

私はこの鳳来村での生活約七ヶ月位、今迄、全く経験した事がなかった生活習慣、その地域の仕来りを体験し、大変勉強になったと今でも感謝しております。

昭和二十一年新春、甲府中学の入学試験を受ける事になりました。鳳来小学校からは私一人先生の付き添いもなく一人で入学試験を受けに行った時の状況、今でもなつかしく思い出します。他の学校の生徒は先生の指導のもと受験をしている様子を比較し、ちょっと寂しさを感じた事を今でもよく覚えています。

甲府一高で体験した勉学の心は伝統校としての規律と“Boys be Ambitious”の精神を糧として今後の各自の進むべき道をしっかりと見極める事を教わり大変感謝しております。又、多くの友人と知り合う機会となり、その後の人生の大きな支えとなりました。

私の幼名は重雄と名付けられました。当家は長男に重をつける習わしになっており、私の父は重治、私の長男は重樹、孫は重哉と名付けました。

戦後十年、印伝の仕事もやっと軌道にのりはじめた矢先、昭和三十年十一月父が脳出血により五十六歳で他界致しました。当時父は襲名により十二代勇七を名乗っておりました。父の死去により私は二十二歳で上原勇七を襲名する事になり、現在に至っております。

ここで印伝の由来についてふれておきます。

印度伝来から印伝（一説）と云われております。佛教と共にシルクロードを経て日本に伝わったとも云われております。

当時日本で調達できる鹿皮と漆を原料として今日に伝えられたものと考えられます。

漆は英語でjapanといいます。

奈良、平安時代 東大寺所蔵 文箱（国宝）
正倉院御物 経本カバー
（印伝博物館に展示）公家が愛用した蹴鞠（けまり）また戦国時代に入り武具として鎧（ヨロイ）に用いられたり、一説によると武田信玄公が印伝の巾着に砂金を入れたとも云われております。

昭和三十年～四十年　国内観光旅行ブーム、県内外の土産品販売店及び、ホテル売店へ納品、北海道から九州迄、一時期札幌、松山に営業所開設。しかし、昭和四十年頃より海外旅行が盛んになり将来の国内旅行の衰退を予想。新しい市場の開拓の必要性を予感し、札幌、松山の営業所を閉鎖すると共に今後の対応を検討。

結果として専門店、デパート、問屋を対象に昭和四十三年、池袋に東京営業所を開設。その後、高度経済成長の時代を予測。昭和五十六年、東京青山へアンテナショップとして直営店を開設。この対応は以外にも社内の活性化に結び付く効果が大きかったと存じます。次に印伝の歴史は着物（和）の時代に育てられ今日に至っており、この脱却は如何にするか。

昭和五十八年、約二年の歳月をかけCarray（キャレイ）シリーズを開発。その後、毎年一ブランドの開発を継続。これはお客様はもとより、社内の活性化に重要な役割を果たす結果に。

平成二年　大阪心斎橋店オープン
平成六年　甲府市川田町に新工場オープン　協同組合ファッションシティ甲府（通称　アリア・ディ・フィレンツェ）
平成二二年十一月　名古屋御園店オープン

当社の指針
(1) 人間尊重の事業経営
　出光興産　出光佐三氏の提唱
(2) 企業の信用の構築
　品質、価格、アフターケア
(3) 伝統の継続
　不易と流行の見極め
(4) 日本の文化として海外市場への挑戦

右記の指針を目標に今後の企業経営を推進して行く所存でおります。

漆付け技法

巾着

LICALEA（リカレア）

昭和20年頃の印傳屋 上原勇七店舗のようす